

栗島 故人宛ての手紙託され12年



届いたはがきをブリキの「私書箱」に入れる達夫さん（三豊市の栗島で）



父の入院後、運営を担う

漂流郵便局は、2013 現代美術家の久保田沙耶さん(38)が老朽化した旧郵便

瀬戸内海の離島・栗島(三豊市)で、故人へのはがきなど宛先がない郵便物を預かる「漂流郵便局」。その局長を12年務めた男性が11月に91歳で亡くなり、息子が後を継いだ。これまでに託された便りは7万弱に上る。「どこかで誰かが、今もはがきを書いている」。そんな父の言葉を胸に、息子は「体が続く限り、父の代わりを務めたい」と誓う。

(浦西啓介)

「漂流郵便局」思い継ぐ

局舎を改装して制作したアートプロジェクトだ。亡くなった人や音信不通の友人らに宛てたはがきを「漂流郵便局留め」として預かり、局内の私書箱にとどめる。旧郵便局で長年働いた中田勝久さんが、久保田さんからの依頼で局長役を引き受け、はがきを管理、展示した。

会期後は閉鎖予定だったが、便りが途切れることはなく、近くに住む勝久さんが続けることに。土曜日には窓口を開け、はがきを直接受け付けた。だが、今年8月、局からの帰り道に転倒して入院。見舞った久保田さんに「足腰を鍛え直し、また戻る」と話した約1週間後の11月9日、容体が急変し、帰らぬ人となった。

局長 11月死去 息子「体が続く限り代わりを」

たのが、長男の達夫さん(65)だった。大学進学を機に栗島を出て、大手食品メーカーに勤務し、定年後もさいたま市で暮らす。漂流郵便局は、たまの帰省時に父の仕事ぶりを眺める程度だった。父が入院後、局舎に入り、台帳を開くと、届いた便りの数がほぼ1日も欠かさず記録されていた。12年間の累計は6万5525通、1日平均にすれば約15通に達していた。ある土曜、荒天で島に渡る船が運休になった。誰かが来るかもしれない、「誰かが来るかもしれない」と言って窓口を開けに出かけた父の姿を思い出した。達夫さんは「誰かに任せるのではなく、父を身近で知る自分が引き継がなければ」と決意した。今は月のうち20日間を島で過ごし、土曜には窓口で座る。届いた便りに「漂流郵便局」の消印を押し、林立するピアノ線にぶら下がったブリキの「私書箱」に差し込む。

新聞やテレビで有名なだった勝久さんに一目会おうと訪ねてくる人は多い。そんな時は事情を説明し、代わりに記念写真に納まる。「父がいないとがっかりされるが、思い出話を聞いてもらい、喜んで帰ってもらえたら」と思っている。

＊

久保田さんは、「漂流郵便局は、島を愛した局長がいたからこそできた」と考え、今も勝久さんを「局長」と呼ぶ。「局員」の達夫さんは話す。「生まれ育った島を半世紀近く離れていた。漂流郵便局を続けることが島への恩返しと親孝行になると思う」

◇

はがきの送り先は、〒769-1108三豊市託間町栗島1317の2、漂流郵便局留め。著作権は同郵便局に譲渡され、はがきの返却はできない。窓口時間は土曜午後1〜4時。漂流郵便局はアート作品で、日本郵便との関係はない。



届いたはがきを手にする勝久さん(奥)と久保田さん(2014年10月25日撮影、三豊市の栗島で)